

# 定住型<sup>1</sup>非母語話者のスピーチレベルシフト - 共生日本語からの一考察

Ohri Richa

## 要旨

本稿は、接触場面における共生日本語の解明を目標とし、一つのコミュニケーションストラテジーとして使用されるスピーチレベルシフトを例に取って、多言語化・多文化化していく日本社会の目指す言語的な方向性を構築する手がかりを探ることを目的とした。共生日本語は、接触場面における新たに生み出される「内容」を言語的に担うものであるといわれている。したがって、接触場面におけるスピーチレベルシフトという「言語」形式を通して、スピーチレベルシフト生起の要因と機能、いわば「内容」の解明を試みた。その結果、定住型非母語話者のスピーチレベルシフトの要因として、「アドレス」、「心的態度」、「力関係」の三つの要因の存在が明らかになった。そして、それぞれのスピーチレベルシフトが、「オンステージマーカ」、「心的距離の短縮」、「母語話者への感謝の気持ち」や「日本語・日本文化について教えてほしい」という機能を果たしていることが判明した。最後に、共生日本語は、接触場面における一つのコミュニケーションストラテジーであり、母語話者のそれへの理解や受容していく姿勢が緊急に望まれることを指摘した。

【キーワード】: 接触場面、定住型非母語話者、共生日本語、スピーチレベルシフト、力関係

## 1. はじめに

言語は文化の中で多様な性質をもち、その言語で構築される会話は創造的につくりあげられる共同的なプロセスと言える。文学批判の分野で活躍したバフチンは「社会的言語的多様性」という概念を導入して、言語において必要な複雑性をあつかう道を開いた。この概念を日本社会に置き換えてみると、そこでは例えば、「一つの日本語」が話されるのではなく、「様々な日本語<sup>2</sup>」が話されている、ということになる。では、現在の日本社会の状況を考えてみよう。近年、定住型非母語話者（以下、非母語話者）が増加している。こういった状況の中で、日本語母語話者（以下、母語話者）と非母語話者が共生するために媒介言語として用いる日本語、いわば共生日本語が重要な意味をもつと考えられる。岡崎（2003b）は、共生日本語は母語話者の頭の中に内在化された日本語ではなく、接触場面におけるやり取りを通して、そのプロセスの中で新たに生み出される「内容」を言語的に担うもので

あると指摘する。

しかしながら、現在の日本社会における共生日本語のあり方には疑問を持たざるを得ない。なぜならば、アメリカでは「様々な英語」が存在し、それぞれが確立したアイデンティティを持っているのに対し、日本ではまだ共生日本語が「様々な日本語」の一つにはなっていない。換言すれば、まだ一つの確立したアイデンティティを持つ「日本語」と言えるまでに至っていない。結果として、一生日本で生活していく定住型非母語話者であっても「一つの日本語」を目指さなくてはならない。これは、非母語話者の日本文化への同化につながり（岡崎 2003a）人権侵害でもある。したがって、「様々な日本語」の一つとして共生日本語の必要性が浮かび上がり、母語話者のそれへの理解や受容していく姿勢が緊急に望まれる。

共生日本語への理解のためにまず接触場面におけるやり取りを通してそのプロセスの中で新たに生み出される「内容」や「言語」はどのようなものなのか、その記述が必要となってくる。本研究では、この「内容」や「言語」を記述するべく、一つのコミュニケーションストラテジーとして使用されるスピーチレベルシフトに着目する。接触場面におけるスピーチレベルシフトという「言語」形式を通して、スピーチレベルシフト生起の要因と機能、いわば、「内容」の解明を試みる。これによって、非母語話者が「言語」を使って、伝達しようとする「内容」に焦点を当てることができる。したがって、接触場面におけるやり取りを通してそのプロセスの中で新たに生み出される共生日本語の特徴が記述<sup>3</sup>でき、「様々な日本語」への扉が開かれると痛感する。

## 2. 先行研究

スピーチレベルシフトとは、同一話者の同一会話内における敬語体の使用から不使用、あるいは、その逆の移行を意味する。スピーチレベルシフトの研究の土台ともいえる生田・井出（1983）では、母語話者の談話におけるスピーチレベルの選択が行われる際、スピーチレベルシフト生起の要因に優先関係があるとされている。まず、談話全体で主体となるスピーチレベル（基本スピーチレベル）が社会的コンテキストによって決定される。そして、話者の心的態度と談話の展開の二つの要因が機能し、話者の心的態度が談話の展開を優先するとされている。この研究をきっかけに、Hashimoto（1992）や宇佐美（1995）は、2者間のスピーチレベルシフトの要因を詳しく述べている。岡本（1997）はスピーチレベルシフトの要因だけでなく、スピーチレベルシフトの指標的機能が母語話者同士の相互行為にどう影響しているのかを明らかにした研究といえる。さらに、森下（1997）、杉山

(2000) はミーティングやグループ討論場面を公的と非公式という場面のフレームで説明しており、発話アドレス、フレームとスピーチレベルシフトの関わりを見ている。

母語話者と非母語話者の接触場面におけるスピーチレベルシフトの研究は上仲(1997)と佐藤(2000)が挙げられる。これら2つの研究は、日本語学習者のスピーチレベルシフトを研究対象にしており、学習者にまだ完全に習得されていないものを教師が把握し、教えてあげることが「日本人の生の会話」スタイルに近づけるための近道であることを指摘している。このような研究は、非母語話者を「一つの日本語」に近づけさせるためのものであるといえよう。しかし、共生日本語を論じる場合、焦点を「一つの日本語」から「様々な日本語」へシフトさせる必要があり、接触場面における非母語話者の日本語に重点をおいた研究が必要となってくる。

### 3. 研究目的及び課題

本研究は、接触場面における非母語話者のスピーチレベルシフトに着目することによって共生日本語の特徴の一つを記述することを目的とする。そのため、接触場面における定住型非母語話者のスピーチレベル及びそのシフトはどのようなものなのか。また、スピーチレベルシフト生起の要因とそれが談話進行上いかなる機能を持っているのかを明らかにすることを研究課題とする。

## 4. 研究方法

### 4.1 対象フィールドの概要

本研究の対象は、地域日本語教育で提案されている母語話者と非母語話者の対話を通じた相互学習の場(以下、対話の場とする)の一つである。対話の場は、地域に住む母語話者と非母語話者が地域社会で生活する上で抱えている様々な問題を共有し、対話を通じて何らかの解決のきっかけをつかもうと始めたものである。2000年12月から2週間に1回2時間、東京都内某大学で集まり、個人が問題に感じていることや他の参加者に提起したいことなどの「トピック<sup>4</sup>」を持ち寄り、意見交換を行っている。

### 4.2 対象データ

本研究では2000年12月から始まった対話の場の以下の3回の会話データを主なデータとして取り上げて分析する。この会話データは、観察、メモ、録音によって収集した。録音したものはすべて文字化し、観察記録やメモと合わせて分析を行った。(Fは非母語話者の記号である。文字化の記号については、本稿末に記載している。)

日程	話題	話題提起者
2001年3月27日	子供の教育について	F3
2001年8月30日	お金の貸し借り	F4
2001年9月27日	わが家の知恵袋	F1

上記のデータを取り上げる理由は、本研究の対象である非母語話者が話題提起をしているからである。よって、話題提起者の非母語話者が全員に向けて話題提起をする際用いるスピーチレベルシフトと、少人数と対話をしている際に使用するスピーチレベルシフトのより詳細な記述が可能になると考える。以下、対話の場の参加者のプロフィールを紹介する。

表1：母語話者のプロフィール

年齢	20代 - 70代
性別	女性9名、男性1名
社会的地位	定年退職者（元会社員）、パートタイム就職者、専業主婦、学生

表2：非母語話者のプロフィール

出身国	イラン、中国、フィリピン
年齢	30代 - 40代
性別	女性3名 <sup>5</sup>
社会的地位	パートタイム就職者、自営業者、専業主婦
日本在住暦	5年～17年
日本語学習暦	自然習得（上級話者） <sup>6</sup>

## 5. 分析結果および考察

### 5.1 基本スピーチレベルの決定

母語話者はまず基本スピーチレベルを決め、その決定要因が社会的コンテキストであると指摘されている（生田・井出 1983）。本研究のデータで観察された非母語話者の基本スピーチレベルは「0 レベル」で、それは社会的コンテキストの影響を受けなかったことがわかった。いつでも、どこでも基本スピーチレベルは「0 レベル」である。そして、基本の「0 レベル」から「+レベル」へのシフトは観察された。ここでは、「+レベル」へのスピーチレベルシフトの例を挙げながら、その要因と機能について記述していく。語レベルにおけるレベルシフトは、本研究のデータにあまり表れなかったので対象から外す。

## 5.2 スピーチレベルシフト生起の要因とその機能

非母語話者の「0 レベル」から「+レベル」へのシフトを分析した結果、スピーチレベルシフト生起には次の三つの要因が関係していることが推測された。それらは、アドレス、心的態度、力関係である。以下、要因毎に詳しく見ていく。

### 5.2.1 アドレス

アドレスとはバフチンが導入した概念で、話し手が誰にむけて発話しているのかということの意味する。例えば、発話のアドレスが参加者全員に向けられている話題提起などの場合、母語話者は「+レベル」を基本スピーチレベルとして用い、この「+レベル」のスピーチレベルが話題提起の最後までレベルシフトされることなく使用される。言い換えれば、発話のアドレスが全員に向けられている際、基本スピーチレベルが「+レベル」で一定するという制約の下におかれる。これに対し、基本スピーチレベルが「0 レベル」である非母語話者は、話題提起をする際、発話のアドレスが全員に向けられているのに関わらず、基本スピーチレベルの「0 レベル」を使用することがわかった。しかし、談話の最初と最後を「+レベル」で括るという特徴的なスピーチレベルシフトの仕方が観察された。以下に、その会話例を一つ紹介する。

**会話例 1** この会話例はF4がオンステージでお金の貸し借りについて話題提起をしている場面である。

1F4: 今日のテーマはね、あの、お金のことについて。私日本に来て一番印象的のことです。4つありますからね。最初、私今全部話して、みなはね考えてこのこと続けてもいいとか、間違いとか、ちょっと検討しましょうね。最初日本で始めてきたときアルバイト先の社長さんね、だからあの、印刷会社だったのね。あの時あの機械足りなくてあ・・・5百万の機械入る予定だったのね。お金ないから、あの、社員に、日本人にね、社員にお願いして誰も出してあげなかったの。だから、あの、社長と私相談して00さん、ちょっとてつだ・あ・なんか・あ・・なんか・{笑い}日本語がちょっとね、あの、もしできればお金ちょっと貸していいとか相談してきたの。(省略) 今日の話はね、感動することとお金こと、あの一二種類で、うん、これだけかな。みんなさん、ちょっと検討してください

2数人:{拍手}

3J3: あ、すごいね。あ、これ違うんだ

会話例1では、参加者全員を対象として話題提起をしていることから発話のアドレスが全員に向けられている。母語話者は、この場合一貫して「+レベル」を用いる。しかし、

F4 は「0 レベル」を用い、一部で「+レベル」へのシフトが確認される。その一部とは、談話の最初と最後が「+レベル」で括られていることである。

**機能：**非母語話者は語りの最初と最後を「+レベル」で括ることによってスピーチレベルに「全員に向けての発話・オンステージの発話」というオンステージマーカとしての機能をもたせていると考えられ、一つのコミュニケーションストラテジーとして使用していると思われる。

### 5.2.2 心的態度

生田・井出(1983)は、母語話者は談話内で相手や話題となっている事柄に対する話者の心的態度の変化を表明するためにスピーチレベルをシフトさせると指摘する。「0 レベル」へのシフトは心的距離の短縮、いわば同調や支持の気持ちを表し、「+レベル」へのシフトは心的距離の伸長を表すとされている。非母語話者を対象とする同様のことが本研究のデータでも観察された。ただし、「+レベル」へのシフトだけで、これにより母語話者への親しみや共感できる気持ちを表していることが推測された。以下にその会話例を紹介する。

**会話例2** 会話例2はF4が「+レベル」へのシフトによって心的距離の短縮を表したと考えられる発話事例である。F4が「そうですね」を使うことによってJ6の発話への支持の気持ちがうかがえる。

1J6：あ・そしたら、例えば日本人に対しては、自分がその勉強する時は、ほとんど勉強するんだと

思うからその一

2F4：ちゃう、あのー

「0 レベル」

3J6：気・気を使わないんだよね？

4F4：そうですね

「+レベル」

4F4は「そうですね」をあいさつことばとして使ったという可能性も考えられる。しかし、他の場面における発話例では、F4は中立的な同意などを表すためには「そうね」や「そうだよ」のような言い方が多く見られることから上の会話例2のように相手への共感を表す強い支持の気持ちを「そうですね」の「+レベル」へのシフトが使われていることが推測される。一方、非母語話者の心的距離の伸長を表す「+レベル」へのシフトは今回のデータでは観察されなかった。

**機能：**非母語話者は「0 レベル」が基本レベルのため、「+レベル」にシフトすることによって、「+レベル」に心的距離の短縮の機能を持たせていると考えられる。このように「+レベル」にシフトすることによって相手への距離を短縮させる事例には「私もそう思います」などのような「+レベル」へのシフトが数多く観察されたため、この機能を母語話者

に対する親しみなどを表すためのストラテジーとして使用されると思われる。

### 5.2.3 力関係

今回の会話データからもう一つ重要な要因として母語話者と非母語話者の間に力関係が存在することが浮き彫りになった。ここでいう力とは、コンテキストごとに規定されるもので、そのコンテキストや状況が生み出したものであり、社会学的に規定されるような権力とは異なるものを指す。

非母語話者が持つ文化や言語の面での knowledge schema は母語話者のそれとは異なる。これは、医者と患者の持つ knowledge schema の違いにも例えられる。Tannen (1993) はこのような knowledge schemas の違いを divergent knowledge schema と名づけている。厳密に言えば、母語話者と非母語話者の接触場面における日本文化・日本語の knowledge schema の違いによってパワーダイナミクスが生じ、両者間の力関係に繋がる。この力関係が、スピーチレベル及びそのシフトにも現れると推測させる。

力関係に繋がる要因は、母語話者・非母語話者の両者にあると考えられ、例えば、母語話者は、日本語・日本文化が母語・母文化であることから、それについて教えてあげることや、非母語話者のそれについての知識の上達を評価してあげることが親切で当然のことであるかのように理解している可能性がある。一方、非母語話者は母語話者と日本語・日本文化の権威 (authority) として接する傾向があり、日本語・日本文化のこととなると教える側・教わる側の関係性がいっそう意識される。

本研究のデータから、力関係は、母語話者の非母語話者への「評価」の言語行動と、非母語話者の母語話者に日本語・日本文化について「尋ねる」という言語行動に表れやすいことが判明した。ここでいう母語話者の非母語話者への「評価」の言語行動とは、非母語話者の日本語に対する評価や母語話者が相応しいと思うような行動を非母語話者がとった場合、その行動に対する評価のことを指す。非母語話者の「尋ねる」という言語行動は特に日本文化・日本語について尋ねるときや日本語が理解できないときのことを指す。

まずは、母語話者の非母語話者への「評価」の言語行動を、非母語話者の日本語に対する評価と、母語話者が相応しいと思うような行動を非母語話者がとった場合の会話例を二つ(会話例3と4)紹介する。

**会話例3** 会話例3は、非母語話者の日本語に対する評価の事例である。非母語話者の日本語が母語話者に評価され、非母語話者が「+レベル」にスピーチレベルをシフトさせる場面である。

1J10: なんか、ちょっと違います?

2F3: そんなことないもんね

「0レベル」

3J3: いや、でもおとなしかった {笑い}

4J10: すごいさ、ゆったりとか

5J6: はっきり言っているもの F3 と比べたらというのものもあるけれども本当に日本人と同じ感じがする

6J3: そう、そう、そう、そう

7F3: そんなことないですよ {笑い}

「+レベル」

会話例3では5J6の「日本人と同じ感じがする」という言葉は言語形式だけに注目すると単なる評価に過ぎないが、実際は母語話者にしかできない言語行動であるといえる。なぜならば、評価をするためには評価するそれなりの「資格」が必要であり、日本語・日本文化の「権威」である母語話者はその「資格」を持っているからである。これは学校場面に例えると、教師は生徒を「よくやったね」と評価しても、学生が教師に対して「よくやりましたね」と評価をすることはあまりないと同じことである。会話例3の場合、7F3は「評価できる資格を持つ母語話者」の knowledge schema に一步近づくことができた、と感謝の気持ちを照れ笑いしながら表し、スピーチレベルをシフトさせたと考えられる。この発話例と同じように洋服などがほめられたときには「+レベル」にシフトしないのに日本語が評価されるときに限って非母語話者の「+レベル」へのシフトが確認された。他の非母語話者の場合、日本について日本人よりよく知っていると評価され、「いえ、とんでもないですよ」のような「+レベル」へのシフトも確認された。

**機能:** 非母語話者はこのようにスピーチレベルを「+レベル」にシフトさせることによって、母語話者への感謝の気持ちを表す機能を持たせていると考えられる。

次に、母語話者が相応しいと思うような行動を非母語話者がとった場合のその行動に対する評価の事例を紹介する。

**会話例4** F4が日本人と一緒に働いてきて感動したときの話をする場面である。

1F4: あ、そう

「0レベル」

2J4: でもね、これやっぱりね、あなたがすごく素直な方だからね、みなさんが日本人の人でもそりゃ悪い人もいればいい人もいる。世界中皆同じだと思うけど、そのあなたの素直さに日本人は感動しているのよ

3F4: あ、ありがとうございます

「+レベル」

基本レベルとして「0レベル」を用いるF4が、2J4の「あなたの素直さに日本人は感動しているのよ」に対して「+レベル」にスピーチレベルをシフトさせることは注目すべきところである。ここでは2J4はF4の「日本人を感動させた行動」を評価しており、評価に

に対する感謝の気持ちを表すためにF4は「+レベル」にスピーチレベルをシフトさせたと予測できる。

**機能：**会話例4においても会話例3同様、非母語話者は「+レベル」にスピーチレベルをシフトさせることによって母語話者への感謝の気持ちを表していることがわかる。このような母語話者の「評価」に対する非母語話者の「+レベル」へのシフトは、会話例3、4以外にも、多数確認された。

次に、非母語話者が日本語・日本文化について「尋ねる」ときにスピーチレベルをシフトさせる会話例を一つ紹介する。

**会話例5** 基本レベルが「0レベル」であるF4が日本語のことばを確認している場面である。

1F4：でも話さないときもある。私はね、三日間前にあのこと電話あったのね、もう一年以上会っていない日本人ですから、だから私に電話して、あの漢方薬の私前漢方薬やっていたから「F4さんいい漢方薬ないかな」と自分の子ども、あの中学校で妊娠したのね。だからあのおる・**おろすですか？** 「+レベル」

2J1：うん

会話例5では、1F4は「おろす」という言葉が正しいかどうか自信がなく「+レベル」にスピーチレベルをシフトさせていることが確認できる。言い換えれば、普段J1に対して「0レベル」を用いるF4だが、日本語について尋ねるときには「+レベル」にスピーチレベルをシフトさせる。日本語以外のことで例えば「までの行き方を教えてほしい」場合は「+レベル」にスピーチレベルをシフトさせないで、「0レベル」で会話を続けるケースも確認された。しかし、日本語のこととなると日本語・日本文化の「権威」である母語話者に教えてもらうため、スピーチレベルの丁寧度をあげて「+レベル」にシフトさせたと予測できる。

**機能：**非母語話者は、スピーチレベルシフトによって、日本語・日本文化について教えてほしいという機能を果たしていると考えられる。

今回の会話データでは、非母語話者は日本語・日本文化について尋ねるときや日本語が理解できないときは、ほとんど「+レベル」にスピーチレベルをシフトさせることが判明した。この現象は本研究の対象者に共通して現れ、様々なバリエーションも確認された。特に、「もう一度お願いします」や「は日本語でなんと言いますか」のような「+レベル」へのシフトが多かった。日本語・日本文化以外のことで尋ねるときには「0レベル」のまま会話が続けられていることが確認されたため、この場合の「+レベル」へのシフトは慣用表現としてというより、

意図的にシフトさせていると考えられる。

## 6. まとめと今後の課題

以上の分析結果を総合的に考えると、非母語話者にとってスピーチレベルシフトは一つのコミュニケーションストラテジーであることがわかる。会話例を見てもわかるように、シフトの仕方は偶然或いはたまたまそうなったわけではなく、非母語話者は、意識してスピーチレベルをシフトさせており、そしてそのシフトが多様な機能を果たしていることがわかった。本研究の対象者に共通する結果として、次のようなことが挙げられる。

- 1) 非母語話者の基本スピーチレベルは、社会的コンテキストの影響を受けず、誰に対しても、どこでも「0 レベル」を基本スピーチレベルとして用いる。その理由としては、次の2点が挙げられる。非母語話者は、実生活の中で幅広い年齢層に接触がなく、彼らの家族構成からも幅広い年齢層、特に、年上の母語話者とはほとんど接触がないことが判明した。本研究の対象者は自然習得者であるため、彼らが使用する共生日本語は周りの言語環境に影響されると考えられる。つまり、彼らに対して周りの人々は「+レベル」を殆ど用いず、「0 レベル」を使用している可能性も否定できない。結果として、「0 レベル」に使い慣れており、基本スピーチレベルとして用いると予測される。
- 2) 非母語話者は、発話のアドレスが全員に向けられていることを示すときにスピーチレベルシフトをする。談話の最初と最後の部分を「+レベル」で括ることによって、「+レベル」にオンステージマーカとしての機能を持たせていることが明らかとなった。それ以外は話題の伝達が優先され、使い慣れている「0 レベル」を用いると予測できる。
- 3) 非母語話者のスピーチレベルシフトの要因の一つとして、心的態度が挙げられる。非母語話者は、スピーチレベルを「+レベル」にシフトさせることによって、母語話者との心的距離の短縮の機能を果たしていることがわかった。これは、母語話者が「0 レベル」にシフトすることによって話し相手との心的距離の短縮を図る（生田・井出1983）と逆のシフトの仕方である。
- 4) 本研究の分析結果から、非母語話者のスピーチレベルシフトの新たな要因の一つとして力関係の存在が浮き彫りになった。非母語話者は「+レベル」にスピーチレベルをシフトさせることによって、母語話者への感謝を表す機能や日本語・日本文化について教えてほしいという機能を果たしていることが判明した。

以上、非母語話者のスピーチレベルシフトの要因とその機能を通して共生日本語の特徴

を記述してきた。本研究の対象者は3名だったので決して結論付けるのに十分ではないが、スピーチレベルシフトの要因とその機能は3名に共通して現れる点においては興味深い現象といえる。また、接触場面における力関係の存在、そしてそれがスピーチレベルシフトの要因になっていることも提示できた。これからも長期滞在や定住を目的とする非母語話者は増えていくと予測される。そうすると、幅広い年齢層の母語話者との接触も増えていき、結果的に共生日本語も形を変えていくことだろう。

非母語話者の日本語は、必ずしも母語話者の話す「一つの日本語」と同様の形式ではなくても、日本語を媒介とした一つのコミュニケーションストラテジーであり、共生日本語である。岡崎（2001）は共生言語なしには、言語集団ごとに孤立し相互に接触できず、相互に分離独立し合うか、あるいは社会的地位の高い言語集団がほかの相対的に小さい言語集団に同化を強制するかという選択しかない指摘している。つまり、共生日本語なしには非母語話者は日本社会に同化するしか選択肢がないといえる。新世紀の先端に行く日本社会にとってはこれ以上悲劇的なものはないといったの過言ではなからう。

本研究は、非母語話者に注目しスピーチレベルシフトを切り口に、共生日本語を記述しようとしたものである。しかしスピーチレベルシフトのような言語形式の詳細な分析を進めるには記述だけではなく、量的な観点も必要と思われる。今後は母語話者の発話も含め、量的な観点を取り入れた分析が必要であると考えられる。また、共生日本語だけではなく、日本社会における複数の共生言語（岡崎 2001）の必要性を確信し、今後の課題にしていきたい。

### 文字化記号の説明

F: 非母語話者	J: 母語話者	? : アクセント上昇	@ : 聞き取り不能
( ): 省略	{ } : 笑い	, : 区切り	⋯⋯ : ポーズ

注

- 1 日本に中・長期或いは永住を志向する非母語話者のこと。
- 2 例えば、言語の多様性を考えた場合、アメリカなどでは様々な英語が話されている。
- 3 本研究で記述しようとするものはあくまでもスピーチレベルシフトという切り口から見た共生日本語であり、そのすべてを説明しようとしたものではない。
- 4 トピックの命名は話題提起者によるものである。
- 5 本来の非母語話者参加者は5名だが、うち1名は筆者なので研究対象としない。もう一人は定住型ではないため研究対象としない。
- 6 3名のうち1名は地域のボランティア日本語教室に不定期的に通っている。3人とも OPI で上級とされている。